

【研究ノート】

活字印刷と宗教改革の関係に見る新しいメディア登場と 社会混乱の一例

樺 島 榮 一 郎

1. はじめに

2010 年ごろからのさまざまな社会の変化は、インターネットの影響から説明されることが多い。2008 年の米大統領選におけるオバマの勝利では、独自に製作した SNS サイトなどのソーシャルメディアの積極的活用が重要な役割を果たしたという(前嶋 2011)。2010 年 12 月に青年が焼身自殺したことをきっかけに、激しい反政府デモが起こり翌年 1 月に 23 年間にわたる長期強権政権が倒れたチュニジアのジャスミン革命は、ツイッターやフェイスブックの利用により焼身自殺やデモの情報が広く共有されたことがきっかけだったとされる(小林 2011)。この革命をきっかけに、アラブ諸国でデモが次々に活発化した、2011 年 2 月の 30 年間続いたエジプト、ムバラク政権が崩壊でも、フェイスブックやツイッターの影響が指摘されている(川上 2011)。その後も、3 月ごろから始まった大規模デモをきっかけに内戦に突入したシリア、8 月のリビアにおけるカダフィ政権の崩壊、12 月にはイエメンで 30 年以上も大統領だったサーレハの退陣などが続いた。これら一連の民主化要求運動は「アラブの春」と総称される、アラブの多くの国々に影響する大きなものとなった。

また、前身組織を改編して 2013 年に成立した後、内戦のシリアで急速に勢力を拡大したイスラム国(以下、The Islamic State of Iraq and Syria の略語である ISIS を用いる)に関しても、インターネットとの関連において説明されることが多い。彼らは積極的に SNS や動画を用いて、世界中から戦闘員や参加者、

協力者を募り、さまざまな国の若者に影響を与えテロをそれぞれの国でテロを起こさせたとされる（福田 2015）（Allendorfer・Herring 2015）。2016 年 6 月のイギリスの国民投票で、EU 離脱が決定した事態も、世論調査では離脱派と残留派の拮抗もしくは残留派の優位が伝えられていたが、ツイッター上での発言では離脱派が優勢だったという（British Politics and Policy at LSE, 2016）（Ontotext, 2016）。2016 年 11 月の米大統領選におけるドナルド・トランプの勝利において、ツイッターとフェイスブックという SNS を積極的に活用したことによりもたらされたことは、本人も含めて（毎日新聞 2016）、多くの人が指摘するところである。トランプ陣営は、SNS を主要なメディアとし、データに基づき費用対効果の高い州に集中し、「メッセージの浸透と潜在的な支持者の発掘、膨大な量のデータ収集や、有権者感情の変化をリアルタイムで察知するために活用した。」（Bertoni 2016）という。

これらの出来事については、「予想を超えた」、「人々を驚かせた」というような形容が使われることが多い。一般の人ならず、専門家の予想と異なる結果が出ることも多かった。専門家とは、特定の分野の過去の出来事や研究、手法に通じている人のことであるから、専門家の予想が外れたということは、長期的に見られた過去の知見と現在の状況が異なっていることを示している。インターネットが社会をどのように変えたのかに関して、様々な分野でのさらなる研究が必要だが、筆者は、特に、この新しいメディアの普及によりおこる言葉や思考、議論のあり方（公共圏）の変化に着目している（樺島 2016）。

しかし、当然ながら、新しいメディアが現れ社会が変化し混乱することは、はじめてのことではない。最初のマス・メディアと言える、ヨーロッパにおける活字印刷の登場以来、新しいメディアの登場により、何度も社会に混乱がもたらされてきた。そして、そのたびに人々は、時間がかかっても必ずメディアを手はずけ、その混乱をおさめ、新しいメディアの存在を前提とした新たな社会を再構築してきたのである。ゆえに、インターネットの影響が明らかになりつつある現時点で、新メディアの登場により変化や混乱がどう始まり、どのように社会はそれに対応したのか、の歴史を知ることが、今後の研究に示唆を与

えるものとなりうるだろう。本論文では、その前半の新しいメディアの登場に伴う、混乱の部分を取り上げる。第2章では、新しいメディアであった活字印刷が可能にしたことを整理する。第3章では、その活字印刷がどのように社会に混乱をもたらしたかの例として、宗教改革を取り上げる。

2. ニューメディアとしての活字印刷

ヨーロッパにおける活字印刷は、1439年ごろ¹⁾、ドイツ西部の都市、マインツ(Mainz)の金銀細工師であったヨハネス・グーテンベルグ(Johannes Gutenberg)が発明したとされる²⁾。この発明は、活字のみならず、油性インク、木製の印刷機(プレス)なども組み合わせた一群の技術で、なかでも最も重要であったのは、活字を鋳造により大量に生産する方法とそれに適した合金の発明であった(Febvre, Martin:1971a= 1998:146)。この活字の大量生産技術の確立により、活字印刷は、瞬く間にヨーロッパに広まっていく。15世紀最後の四半世紀に活字の売買が始まり、専門業者による活字製造がおこなわれるようになったことも普及を加速した(Febvre, Martin:1971a= 1998:168)。その広がりと数は、「15世紀なかばにはヨーロッパのどんな所でも知られていなかったにもかかわらず、1500年には主要な地方の中心地のすべてに印刷業者の作業場がみられるように」(Eisenstein:1983=1987:21)なったほどであった。

活字印刷の普及の影響は、さまざまな部分に及ぶ。活字印刷が変化させた情報伝達のあり方を整理すると以下のようになる。

第一に、本の生産量が爆発的に増えたことである。活字印刷の普及以前には、手書きで行う写本が主な本の複製の方法であり、14世紀には組織的な写本が行われるようになったものの、当時としては例外的に大量に注文された、大学で使用される小さな概論書でも、200部、400部といった程度であった(Febvre, Martin:1971a= 1998:100)。それがグーテンベルグが印刷業を始めてから50年後の、15世紀末には、「少なくとも3万5000点の書物、低く見積もっても1500万から2000万部にのぼる書物が出版」(Febvre, Martin:1971b= 1998:41)され、印刷工房はヨーロッパ中の、小都市も含む236地点に広がったのである。これ

により、流通する情報量は爆発的に増加したわけで、活字印刷という新メディアがヨーロッパ社会に非常に大きなインパクトを与えたのも必然であったと言える。

第二に、本の標準化・均質化が行われ、情報伝達がより効率的に行われるようになったことである。写本には、著者名・タイトル・出版地・出版社名・刊行年などを記す「扉（タイトルページ）」と呼ばれる巻頭のページがなかった。活字印刷の時代になると、本の流通が広範囲に広がったため本の身元確認が必要になり、宣伝のためもあって、当初は奥付（巻末のページ）に印刷地・印刷者名・正確なタイトルや著者名を、1475年から1480年以降には、それらを巻頭に移動させ出版社のマークを入れた、扉が登場することになる（Febvre, Martin:1971b= 1998:222-225）。本の書誌情報が確立したことにより、目録の編纂が可能になり、読者は、どのような本が出版されているかを知り、自分が必要としている特定の本を入手しやすくなった。

また、写本では、1冊ずつ、ページごとに書かれている内容が異なっていたため、ページ番号を入れるという概念がなく、特定の部分を他の人に示すことが困難であった。参照を示すためには細かく節を入れる必要があったが、紙が高価だったことから、文字がぎっしり詰め込まれ、行間も狭く、節ばかりか章の切れ目にも余白がなく、参照箇所を見つけるのは困難であったし、何より読みにくいものだった。ページ番号の最初の形態は、製本の際、ページを順序通りに間違いなく配置するために、折丁の順序をアルファベットで表し、折丁の何枚目にあたるかを示した数字を付けたり、一葉（対面した2ページ）ごと、つまり2ページごとに番号を付けたりしたものである。1ページずつに番号を付けたのは、1499年発行の本が最初で、これが一般化するのには1525年以降である（Febvre, Martin:1971b= 1998:230-235）。ページ番号以外では、大小の活字、欄外見出し、脚注、目次、索引や、読みやすいレイアウト、正確な校正など、読者が読みやすく使いやすい本を制作する様々な工夫は、1500年よりかなり前から、印刷業者間の競争により行われ、加速していった（Eisenstein:1983=1987:27-28, 33）。これらにより、遠く離れた人同士が共通の

本を持っているという前提で、情報を共有し議論することが可能になったのである。

第三に、活字印刷が議論や情報共有の基礎となる言葉を変化させたことを指摘できよう。まず最初に、アルファベットやつづりの変化が挙げられる。写本では、字数を少なくする要求が高かったのだろう、接文字符で結ばれた合字や（ā=an / am, q=quia 等の）省略記号が多用されていたが、活字印刷では効率の面から鋳造すべき活字の種類を減らす方が有利であり、合字や省略記号の文字は次第に姿を消し、基本的なアルファベットに統一されていった（Febvre, Martin:1971b= 1998:162-163）。

言葉の変化のなかでも最も影響が大きかったのは、ラテン語から各国語への変化である。活字印刷の登場以降、約 50 年間は、出版された本の多くが、ヨーロッパにおける知識人層の共通言語であったラテン語で書かれた古典であった。しかし、徐々に各地で使われていた言葉である俗語で出版される本が現れるようになり、特に 1530 年ごろからその傾向は明確なものとなった。この背景にもやはり、資本主義のメカニズムが働いている。すなわち、より多くの本を販売するためには、少数の人しか読めないラテン語よりも、読める人の数が多い俗語の本を出版するようになるのは、必然である。これに伴い、俗語とされてきた各地域の言葉のつづりや文法が、統一化、定型化され、各国の国語、文章語へと固定化していく。ルターは、出身地ザクセンの書記局で使われた言葉をベースに、続き子音（nn, tt）などを廃しつづりを簡略化、文法においても方言の影響を徐々に取除いてドイツ語を徐々に形成していった。これと並行して、「正しい」文法を解説するドイツ語の文法書も 1525 年ごろに現れる。植字工が原稿の間違ったつづりを機械的に標準的なつづりに置き換えていったことも、つづりの定型化に寄与した。注目されるのは、ルターが語彙にとりわけ注意を払ったことである。正確に意味を伝えることとともに、読みやすさ、分かりやすさを重視し、多数ある同義語の中から民衆が使用することの最も多い単語を選び使用した。そしてこれらの語彙が標準的なドイツ語の語彙となっていたのである。この現象は他のヨーロッパ諸国でも同じく起こった。イギリ

スでは、ドイツと同じく、宗教改革に関連して多数販売された書籍、すなわち 1549 年の『通常祈禱書 および秘跡の授与』および 1567 年の『詩篇全書』が国語の確立に大きな役割を果たしたが、ここでも語彙は簡明で分かりやすいものとなっている。シェークスピアがその全作品で 2 万 1000 語を使用しているのに対し、6500 語のみで構成されていたのである (Febvre, Martin:1971b=1998:309-317)。つまり活字印刷によって生み出された、この新しい言葉は、ラテン語という外国語であることの障害を無くしたのみならず、平易な表現を用いることによって、本を読める人の数を飛躍的に増大させたのである。

その一方で、これらの俗語の統一化、定型化は、方言や小数の人にしか使われていない言語を非公式な言語とし、それらが使われていた空間をも採り込み、公式な国語の通じる空間を広めるとともに、ヨーロッパを国という単位に分断していった。国語の成立がナショナリズムの意識や中央集権的な国家の成立に大きな影響を及ぼしたというのは多くの識者が指摘するとおりである。

3. 新しいメディアがもたらす混乱としての宗教改革

では、この画期的な新メディアである活字印刷は、社会をどのように変化させたのであろうか。この点に関しては、科学革命、宗教改革、ナショナリズムの成立、教育の変化、著作権制度の成立など、さまざまな指摘があるが、それらを総合すれば、新しいメディアの作り出す新しい環境に適応した新しい方法の模索と成立ということになろう。新しいメディア、さらに広く言えば新しい技術が出現した際に、それを使って利益を追求したり、生活を良くしようと工夫したり、何かしらの改善をしようという人間の性を全く無にすることはできない。そうであれば、それを生かすにせよ抑制するにせよ、人や社会は新しい技術やその使用に対する対応が求められる。活字印刷のように汎用性が高く影響力の大きな技術の場合は、国家の体制といった大きなものから、ビジネス慣行といった小さいことまで、社会のさまざまな部分での新しい対応が必要になるのである。

しかし、その新しい秩序が形成され、多くの人びとに当然のことだと認識さ

れるようになるまでには、混乱が付きまとう。混乱とは古い体制から新しい体制への移行期の状態にあり、既存の秩序が弱まるなかで、新しい秩序も確立されていない状態を示すのである。ここでは、活字印刷という新しいメディアが引き起こす混乱の例として宗教改革を取り上げる。

一般に宗教改革は、1517年10月にドイツのヴィッテンベルク大学の神学教授で修道士だったマルティン・ルターが、カソリック教会の贖宥状の販売を批判した「95カ条の論題」を、ヴィッテンベルクの教会の門の扉に張り出したのが始まりとされる。ラテン語で書かれていたそれは、すぐにドイツ語に翻訳されて印刷され、貼り紙や小冊子としてドイツ中に広まっていった (Roger, Guglielmo, ed, 1997=2000:288)。しかし、ルター自身が活字印刷の力を考慮して、この貼り紙を張り出したかという点、全く考慮していなかったと言えるだろう。ルターは専門家むけの言語であるラテン語でこの文書を執筆し、当時、討論の場として一般的に使われていた教会の扉に掲示した (Eisenstein:1983=1987:161)。つまりルターは既存の (古い) メディアと言語を使って、既存のやり方で自分の考えを専門家に広げようとしていたのであった。論題を公表してから6か月後に教皇レオ十世に対して、ルターは以下のように述べている「私の論題が他の著述や、実のところ他の教授方の書かれたものに比べても、どうしてこれほど多くの場所にまで広まったのか、それは謎です。」 (Eisenstein:1983=1987:161) したがって、著作権の確立されていないこの時代に、このルターのコンテンツの価値を発見し、ドイツ語に翻訳して新しいメディアである活字印刷に載せたのは、印刷業者ということになる。すでにドイツ中に広がっていた印刷のネットワークは、なんらかの燃え上がるきっかけを待っていたのである。

しかしルター自身も、すぐに、最初はおずおずと、しばらくすると自信を持って、印刷と俗語であるドイツ語の力を認めるようになる。実際、ルターの著作は飛ぶように売れた。1519年の書簡は「ルターの『神学』および『父なる神の解釈』などは「売られているのではなく、むしろ書店からもぎ取られている有様だった」と報じている」 (Febvre, Martin:1971b= 1998:253)。1518年から25

年にかけて販売されたドイツ語出版物の三分の一以上がルターの本だったのである。

カソリック側も手をこまねいていたわけではない。大衆向けに考えを伝える印刷物としては、パンフレ（パンフレット）と呼ばれる数頁の、時には挿絵や戯画を交えた小冊子が主となって、パンフレ戦争と呼ばれる状況が生まれた。過激で華々しいパンフレは、1520年から30年にかけて、630点が発行され、一大キャンペーンの状況を呈していたのである。その多くがプロテスタント側のもので、信仰に関する考え方を簡潔にまとめたり教皇や修道僧を嗤いものにしたものであった。こういった状況のなかで、カソリック側の著名な修道士、トーマス・ムルナー（Thomas Murner, 1475 – 1537）が、ルターを嘲笑する『大馬鹿者ルター』を1522年に出版したものの、その売れ行きは不振だったように、総じてカソリック側の攻撃文書は不人気だった³⁾ (Febvre, Martin:1971b=1998:253-255)。その後、印刷業者がカソリックの本を積極的に取り扱わなくなったのは当然のことであったと言えよう。

印刷という新しいメディアとそれが伝える新しい考えへの熱狂から、1525年におこったのがドイツ農民戦争である。領主に対して集団で権利要求を行うドイツ農民の蜂起は、14世紀から散発していたが、15世紀後半から1525年までの間に回数も増加し、起こった地域も広がっていた（前掲:1998:21）。しかし、1525年の、西南ドイツの成年男子の少なくとも60-70%が参加したとされるドイツ農民戦争は、参加者も、関係した地域も圧倒的に大きなもので、「中世最大の大衆運動」とされている（前掲:1998:26）。そして、この背景に、宗教改革があることは、後世の研究者のみならず、この運動に参加した当事者たちにも強く認識されていた。1517年のルターに続き、1523年にスイスのチューリッヒでツヴィングリが宗教改革運動を開始し、これらの運動に刺激された様々な改革者や改革グループが出現した。彼らの思想は、無数のパンフレとなって民衆に普及し、「社会を根本的に変革する革命的な「神の法」原理となった」（前掲:1998:23）のだった。当時のバイエルン侯国の官房長レオンハルト・エックは、手紙で「反乱の原因はルターの教義にあり、農民は神の言葉、福音、兄弟

愛を求めている」と記している（前掲：1998:76）。これが具体的にどのようなものであったかと言えば、神との関係において、いかなる人間も平等で自由であり、自治を行う権利を持つというものであった（前掲：1998:76）。この考え方を背景に、農民は蜂起し、牧師の選任の権利、農奴制やそれに関連する税金、共有地の侵害、不当な賦役、死亡税の改善を 12 箇条にして印刷し、領主たちや社会に広く訴えたのであった。

ルターも印刷物でこの 12 箇条を知ったが、それに対するルターの反応は、現在から見れば意外なものである。ルターは領主の圧政をも非難しているが、暴動をおこした農民はキリストに背いているとし、その要求や運動を厳しく非難したのである。「シュヴァーベン農民の一二箇条に対する平和勧告」というこの文書の後半では、各条項について論評しているが、たとえば農奴を解放せよという第三条に関する論評では、アブラハムや預言者も奴隷を持っていたとし、「この世の国というものは、そのなかにすむ人々のあいだに不平等が存しないならば、成立しない」として、この要求を切り捨てている（ルーテル学院大学編：2005:521）。ルターの解決策は、「諸侯のなかから若干の伯と領主、都市からは、若干市参事会員を選び、彼らをして問題を有効的に討議せしめまた解決せしめること」であり、諸侯は「農民も生きるための空気と余裕をうるよう、暴政と抑圧から少しは譲歩する」ようにとし、農民は「問題がたとえキリスト教的方法で（神の正義に従って）処理されなくとも、人間的な権利と協約に従って解決されるように、そのあまりに多くかつ高く要求する若干の条項を法規し、断念する」べきとしている（ルーテル学院大学編：2005:525）。結局、農民の蜂起は、領主側との軍事力の差もあり、軍事的に鎮圧されたのであった。

ルターのこのような反応の要因は、その時代的背景のみならず、かつてはルターの信奉者であったが次第に共産主義的な主張をおこなうようになり対立するようになった神学者トマス・ミュンツァー（Thomas Müntzer, 1489 – 1525）が農民を煽動していると考えていたこと、ザクセン公と個人的な繋がりがあったことなども挙げられようが、本論文の、新しいメディアの登場と混乱という視点からは、ルターの著作と印刷がもたらした大衆の熱狂とその結果が、ルター

の全く予想しなかったことであったため、ルター自身が強く脅威を感じたことを指摘できる。1922年にドイツ語訳の聖書を出版していたルターだが、農民戦争後は、民衆が自分自身で聖書を読むのではなく、聖書との接触を教会という専門家の管理下におくべきだと主張するようになる。そして、1529年に、教理問答書を出版すると、「教理問答書は一般信徒にとっての聖書である」と主張するようになり（Roger., Guglielmo, ed, 1997=2000:297-299）、民衆の読むべきものを管理しようとしたのであった。また、農民戦争以降、パンフレの発行も減少していったのである（Febvre, Martin:1971b= 1998:259）。

4. おわりに

これまで見たように、新しいメディアの登場と、それを使った新しい言説、言葉のあり方、大衆の熱狂と混乱、といった観点から、宗教革命を見ることも可能だろう。今回の論文では、取り上げることができなかったが、口頭での対面での言葉（つまり古いメディア）を使うカソリックへの揶揄も見られる。また、活字印刷の活用に失敗したカソリックは、印刷を取り締まり、ラテン語の聖書をかたくなに守るようになり、印刷メディアはプロテスタント、口頭や絵、建築などの古いメディアはカソリックという、メディアによる棲み分けがなされるようになる点も今後、取り上げるべきだろう。

さらには、このような混乱が、他の大衆的な影響力を持つ、メディアの登場時にも存在したのかどうか、また地域が異なっても同じ現象が起きるのかは、興味深い問題である。この観点から、ラジオや、日本における印刷メディアの登場時などを見ていく必要があると考えられる。

参考文献

- 樺島榮一郎 (2016) 「インターネットと「過激化」についての考察—インターネットはどのように思考と議論、社会を変えるのか」『地球社会共生論集』創刊号, 43-62 頁
- 川上 泰徳 (2011) 「エジプト「1月25日革命」でメディアが演じたそれぞれの役割」朝日新聞社ジャーナリスト学校『ジャーナリズム』2011年07月号 (254), 4-11 頁
- 小林啓倫 (2011) 「チュニジアの「ジャスミン革命」でフェイスブックはいかに動いたか」朝日新聞社ジャーナリスト学校『ジャーナリズム』2011年07月号 (254), 30-39 頁
- 毎日新聞 (2016) 「トランプ氏 大統領選「SNSが勝利の助けに」」毎日新聞 2016年11月14日朝刊
- 前嶋和弘 (2011) 「ソーシャルメディアが変える選挙戦—アメリカの事例」清原聖子、前嶋和弘編『インターネットが変える選挙：米韓比較と日本の展望』慶應義塾大学出版会
- 前間良爾 (1998) 『ドイツ農民戦争史』九州大学出版会
- Bertoni, Steven (2016) 「トランプの「秘密兵器」娘婿 J・クシュナーが初めて語る、歴史的勝利の舞台裏」『Forbes Japan』<http://forbesjapan.com/articles/detail/14354/1/1/1> accessed on December 24, 2016
- 福田充 (2015) 「イスラム国の「ネット戦略」と報道のあり方を考える」『THE PAGE』<https://thepage.jp/detail/20150219-00000004-wordleaf> accessed on December 24, 2016
- ルーテル学院大学／日本ルーテル神学校ルター研究所 (2005) 『ルター著作選集』教文館
- Allendorfer, William H., Herring, Susan C. (2015) *ISIS vs the U.S. government: A war of online video propaganda* <http://firstmonday.org/ojs/index.php/fm/article/view/6336/5165> accessed on January 12, 2016
- British Politics and Policy at LSE. (2016) *How Leave won Twitter: an analysis of 7.5m Brexit-related tweets* <http://blogs.lse.ac.uk/politicsandpolicy/how-leave-won-twitter/> accessed on December 24, 2016
- Chartier, Roger., Cavallo, Guglielmo., ed, (1997) *Histoire De La Lecture Dans Le Monde Occidental*, Seuil (田村毅・片山英男・月村辰雄・大野英二郎・浦一章・平野隆文・横山安由美訳 (2000) 『読むことの歴史—ヨーロッパ読書史』大修館書店)
- Eisenstein, Elizabeth L. (1983) "The Printing Revolution in Early Modern Europe" Cambridge University Press, Cambridge (小川昭子ほか訳、別宮貞徳監訳 (1987) 『印刷革命』みすず書房)
- Febvre, Lucien., Jean Martin, Henri., (1971a) *L'apparition du livre* 2nd edition, Albin Michel, Paris. (関根素子・長谷川輝夫・宮下志朗・月村辰雄訳 (1998) 『書物の出現 上』筑摩書房)
- Febvre, Lucien., Jean Martin, Henri., (1971b) *L'apparition du livre* 2nd edition, Albin Michel, Paris. (関根素子・長谷川輝夫・宮下志朗・月村辰雄訳 (1998) 『書物の出現 下』筑摩書房)

Ontotext. (2016) *#BRexit Twitter Analysis* http://www.ontotext.com/documents/white_papers/brexit-twitter-analysis.pdf accessed on December 24, 2016

注

- 1) 実際に印刷を始めたのは、1450 年頃とされる (Febvre, Jean Martin:1971a= 1998:157)。
- 2) 人類にとっての最初の活字印刷は、1041 ～ 1048 年ごろの中国 (北宋) で発明され、陶製の活字を使ったものであった (Febvre, Jean Martin:1971a= 1998:198)。金属活字は、14 世紀後半の朝鮮で発明されたとされ、グーテンベルグの活字印刷は、ヨーロッパでの発明となる。
- 3) カソリックとプロテスタントのメディア利用を考える上で興味深く、なぜ不人気であったのかを検討することは重要であるように思われる。カソリックの読者が少なかったのか、印刷業者の宣伝や販売網に差があったのか、印刷業者の協力が得られなかったのか、内容が面白くなかったか、など、さまざまな要因が考えられよう